中世・草戸千軒探検⑯

～履く～

草戸千軒Ⅰ展示室では、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする時期の、草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生活の様子を紹介しています。

前回は、「装う」のコーナーから衣服と化粧について紹介しました。今回は人々の足元を支えた履物を、「履く」のコーナーに探ってみます。

中世の人々が日常生活で利用した履物は、消耗品であり、現在まで伝わるものはほとんどありませんでした。そこで、絵巻物など絵画資料を中心とする研究が進められてきました。しかし、絵画の描写は間接的な資料であり、履物の実態に迫ることは困難でした。

そうした絵画資料の限界を取り払うことになったのが、草戸千軒町遺跡に代表される中世遺跡からの出土品です。こうした出土品によって、不明な点の多かった履物に関する研究は大きく進展しました。

草戸千軒町遺跡から出土している履物の代表的なものは、草履・板金剛・下駄です。

「草履」は現代でも目にする機会の多い履物で、藁などの繊維を編んだ台に、鼻緒を取り付けたものです。旅行や労働など、さまざまな機会に利用されていたと思われます。

草　履

「板金剛」は、スギやヒノキなどの薄板を芯に用い、その上を藁や藺草などでおおったものです。遺跡からは本来の形が完全に残る資料は出土していませんが、草履状木製品と呼ぶ芯板の部分が多数出土しています。また、表面をおおった藁などの繊維が部分的に確認できる資料もあります。東大寺の修二会（お水取り）で使われる板草履がこれに似た履物で、現在の雪駄へとつながっています。芯は縦方向に2枚の板をつないでおり、使わないときは半分に折りたたむこともできたようです。手軽に履けることから草戸千軒の集落では最も一般的な履物であったと考えられます。

板金剛の芯

「下駄」は、台の下に二枚の歯をもつ履物で、中世には「足駄」と呼ばれていました。本来はぬかるみなど足の汚れやすい場所で利用する履物だったようですが、中世には日常的な履物として広く利用されるようになっていました。別の材で作った歯を台に差し込んだ「差歯下駄」と、一枚の板から台と歯を作り出した「連歯下駄」とがあり、草戸千軒町遺跡では連歯下駄を中心に、差歯下駄も出土しています。

差歯下駄

このように、草戸千軒町遺跡の発掘調査によって当時の人々が利用していた生活用具の実物を研究対象にできるようになり、材質や製作技術など、多くの情報を得ることができたのです。

（主任学芸員　鈴木康之）

連歯下駄